仲間がいれば、もっと羽ばたける―これからの東北のために。

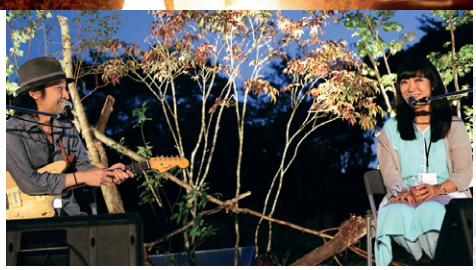
GAMA ROCK

始まりは震災発生1カ月後。
ある日の炊き出しと野外ライブが、人々の心に希望の火を灯しました。
「一人でも多くの人に塩竈の魅力を伝え、塩竈の街を元気にしたい」
希望の火は「GAMA ROCK FES」となって、今年も塩竈を熱く勇気づけました。

GAMA ROCK の原点となったライブ（2011 年 4 月 17 日）

震災発生から1カ月が経過した、平成23年4月17日の日曜日。仙石線本塩釜駅からほど近い元ホームセンターの駐車場で、その後の潮流の原点となる、一つのライブが開かれていました。避難所の掲示板やツイッターを見て集まった1000人の人々。その中央では、円形に並べられたキャンドルの炎が、揺らめきながらミュージシャンを照らしていました。静寂の中に響く、アコースティックの歌声。人々はただ寄り添うように、その歌声に耳を澄ましました。生きることに懸命で、忘れていた心の安らぎ。それぞれの口元によみがえった歌が、いつしかミュージシャンの歌声と重なり、港町の星空に響いていました。人々の心に、小さな火が灯った瞬間でした。

この炊き出しとライブを開いたのは、故郷塩竈を拠点に支援活動を行っていた、写真家の平間至さんと、震災直後から行動を共にしてきたATSUSHI（Dragon Ash/POWER of LIFE）さんのお2人。1年間で50回以上も塩竈へ足を運び、炊き出しや物資の支援を行いながら、現地の声に耳を傾



けてきました。「自粛することはない、できる人がちゃんとやり始めた方が良い」。さまざまな迷いを払拭し、実現したのが4月17日の幻想的な光景でした。

「さらに継続的な活動を目指したい」。そんな平間至さんとATSUSHIさんの強い思いから始まったのが、震災翌年から開催された「GAMA ROCK FES」でした。

「MUSIC」、「ART」、「FOOD」を通して、一人でも多くの人に塩竈の魅力を伝え、塩竈の街を元気にしていく。それが新しく生まれる「GAMA ROCK」のコンセプトでした。

「でも、『GAMA ROCK』とは言っても、私たちも含めて、まだ誰も見たことの無いものです。周りでは『いったい何をしているの?』という声もありました」

現地の塩竈でFOOD部門を統括する髙橋英良さんは、動き出した当時の様子をそう振り返ります。

「だから、1回目の開催で1000人の人々が会場に来た時には、本当にみんな震えるほど感動しました。『あの4月17日の思いを共有する人たちが、こんなにもいたんだ』と。その中には、若い人たちばかりではなく、小さな孫の手を引いて来るじいちゃんやばあちゃんの姿もあるのです。その光景を見て、ハッと気が付きました。『そうか、これが私たちが作ろうとしていたGAMA ROCKだったんだ』って。」

ピクニックに来た家族のように、人々もミュージシャンも、思い思いに幸せなひと時を過ごすGAMA ROCKの会場。ART部門を取りまとめる高田彩さん(ビルドフルーガス)もGAMA ROCKを「誰もが故郷を感じることができる場所」だと言います。

「あるミュージシャンが、『ここに来ると、自分が心から受け入れられていることを感じる。だから、また帰って来たいと思う』、そう私に話してくれました。彼らもまたミュージシャンとしてよりも、むしろ一人の人間として、4月17日の思いを共有する仲間として、GAMA ROCKに来ているのです」

第3回目となる「GAMA ROCK FES 2014」のポスターには、「東北のために」という言葉が新たに刻まれました。平間至さんやATSUSHIさんと共に、大槌町や思いを共有する仲間のイベントを訪れてきた髙橋英良さんは言います。

「被災地には、思いを同じくする人たちがたくさんいます。仲間がいればもっと羽ばたける。だから、お互いに手をつないで、たくましく生きる。困っている人がいれば助け、時には泣くこともある。GAMA ROCKが目指しているのは、ただそれだけのことだと思っています」

思いを共有するたくさんの仲間が、今年もまた「故郷」塩竈へ戻ってきます。あの日の思いを語り継ぎ、お互いの手をつなぐために。そして、これからの「東北のために」。